Kiryu Junior College

過去2年間にみる医学英語に対する助産師学生のニーズ

The Medical English Needs of Midwifery Students As Seen in the Last Two Years

鈴木　由美

要　約

助産学の科目として，医学英語を7回の講義で組み入れている．この講座はそもそも「助産学英語表現法」として，外部講師による講義で会話や読解が中心であったが，講師が変更してからは学生それぞれの学力差なども考え，目標や講義の水準を変更した．学生にとっては専門科目の名称でありながら，助産学での英語は一般教養と同様，気の張らない科目としての位置づけがあると思われる．7回の講義で得られることは読解力などよりも，実習にてカルテが解読できることが最低限の目標である．今回の学生の半数は「英語が受験科目にはない助産師学校」を受験している．その一方で4分の3以上が英語検定など何らかの受験暦もあった．英語にまったく関心がない訳ではない一方で，半数はできれば専門課程では英語を勉強したくないという傾向も示唆された．過密な助産学のカリキュラムの中に7回も英語の講義を組み入れるからには，学生のニーズを把握し，それに見合った内容の講義を組む必要がある．今回は昨年度，今年度の学生に同様の事前アンケート調査をおこない，それをもとに今後の講義の内容を検討するための資料にしたいと考え，2年間の学生のニーズをまとめてみた．

はじめに

助産学英語表現法の講義を担当して3年目に突入した．かつては外部講師により，医学英語の読解を中心にした講義が展開された．またテストも講義中に行われた．読解の教材は外部講師による著書を用いていた．

平成17年度より助産師学生対象の講義を筆者が担当することになり，これまでの学習効果や学生の学力なども考えるとばらつきがあり，読解を中心とした講義がわずか7回で終了することは無理があることを予測した．また初年度の5期生からの授業評価などを参考に，講義内容を多くすることよりも，産科の知識に直結することが検討事項となった．

したがって，元来助産師教育の中で英語の講義を取り入れる際に，余裕のない助産師学生にとっては少しでも産科学に結びついた学習内容を取り入れたほうが学生の取り組みにも熱意が向けられるのではないかと考えた．

そこで英語学習のニーズを中心に，3年間にわたり事前アンケート調査を行ってきた．その中でも2年間の調査内容はほぼ同一で，34名のデータを得ることができた．今回はその結果に着目し，来年度以降にどのような講義計画を組むことが妥当かを検討することを目的とした．

研究方法

研究対象：当学の平成18年度入学～19年度入学の専攻科の助産師学生（6，7期生）34名（有効回答率100％）

倫理的配慮：研究参加の自由，研究による不利益を被らないこと，個人情報やプライバシーの保護について，および回答の如何が成績や講義中の処遇には一切関係ないことを口頭で説明した．

調査方法：講義開始前にそれまでの英語学習に関して，および今後の目標などについて約50項目について自作で調査用紙を作成した．

結果と考察

1）学生の英語学習の関心

英語学習の関心は**表1**に示すとおりであった．

75％以上の学生が英語圏の国に行くことに関心をもっていた．また半数以上の学生が，英会話CDなら興味があると答えており，音声には興味があることが伺えた．新聞記事や文献など，文字が媒体の英語への関心は低いことがわかった．したがって，講義を組むにあたり，文字の多い媒体を用いないほうが，学生の受け入れがよいのではないかと推察される．

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

表1．英語への関心

		肯定群	%
1	外国語に興味がない	5	14.7
2	英語以外なら興味がある	3	8.8
3	英会話なら興味がある	20	58.8
4	英語の音楽CDに興味がある	19	55.9
5	英語圏の国に行くことに関心がある	26	76.5
6	新聞雑誌の記事に関心がある	2	5.9
7	英語の文献に関心がある	1	2.9
8	英語を使った仕事に関心がある	8	23.5

2）到達目標について

到達目標は表2に示すとおりであった．

表2．英語の目標

		肯定群	%
9	英単語が読める程度	26	76.5
10	専門用語が分かる程度	31	91.2
11	一般的な文章が読める程度	15	44.1
12	専門書が読める程度	25	73.5
13	英語の文章が書ける程度	8	23.5
14	英語を使って受験（修士）したい	3	8.8
15	英語を使って専門活動したい	9	26.5
16	外国人とコミュニケーションがとりたい	20	58.8
17	海外旅行で困らない程度	27	79.4

英単語や専門用語が分かる程度に学習したいという学生が多かった．また専門用語のほうが，一般の英単語よりも関心が高く9割以上の学生のニーズがあった．一般の英単語，専門用語，専門書など総じて「読める」というニーズを7割以上の学生が持っていた．また外国人とコミュニケーションがとれることを目標にする学生は半数以上であった．海外旅行などについても8割近くの学生にニーズがあった．

3）英語のイメージについて

英語のイメージについては表3に示すとおりであった．「外国人とのコミュニケーションの道具」「読めると仕事ができそう」というイメージをもつものが8割以上いた．「トピックが読める」「書ける」「わかる」ことで「仕事ができそう」なイメージを持つと考えているものが半数以上いた．書けるよりも，「読めるだけで仕事ができそう」という印象があることがわかる．「煙たがられる」というイメージを持つものが少なかったのは，最近四年制大学卒以上の看護職が増えてきたことが背景にあるのではないかと考えられる．

表3．英語のイメージ

		肯定群	%
18	英語が読めると仕事ができそう	28	82.4
19	英語が書けると仕事ができそう	20	58.8
20	英語が分かると評価される	18	52.9
21	英語が分かると煙たがられる	6	17.6
22	外国で人助けができそう	28	82.4
23	トピックが読めると格好いい	22	64.7
24	外国人とコミュニケーションとる道具	30	88.2

4）外国人のイメージ

外国人のイメージは表4に示すとおりであった．「外国人に接近したい」と考えているものが半数以上いるが，その反面「人種によっては近寄りがたい」という考えをもつもの，「すべて近寄りがたい」と考えるものがいた．当学の通学エリアでは，英語圏以外の外国人の在住が目立ち，英語が通用しない外国人が多い．英語を学んだところで，生かす機会がない現実を目の当たりにしていることも背景にあると考えられる．次に示す英語学習の経緯の中で「群馬県では英語が必要ない」と回答したものがいることは，そのような背景が反映しているものと考えられる．

表4．外国人

		肯定群	%
25	外国人に接近したい	20	58.8
26	人間なら外国人であると意識しない	10	29.4
27	人種によっては近寄りがたい	11	32.4
28	外国人というと全て近寄りがたい	4	11.8

5）これまでの英語学習の経緯

これまでの英語学習の経緯は，表5に示すとおりであった．

表5．英語学習経験より

		肯定群	%
29	高校までの時点で英語が苦手	22	64.7
30	もともと英語に興味があった	19	55.9
31	中学校卒業の時点で英語の成績が良くない	13	38.2
32	高校卒業の時点で英語の成績が良くない	16	47.1
33	受験科目に英語がない看護学校を受けた	11	32.4
34	受験科目に英語がない助産師学校を受けた	17	50
35	看護学校に入れば英語は勉強しないと思った	11	32.4
36	助産師学校に入れば英語は勉強しないと思った	17	50
37	一般教養で習った英語は役立たない	16	47.1
38	看護学校の授業では医療系の英語を学んだ	23	67.6
39	助産師学校で英語をやる必要はない	4	11.8
40	群馬県で英語は必要ない	5	14.7
41	英語が必要なのは大学院受験だけである	3	8.8
42	看護学校の英語はつまらない	10	29.4

半数以上が高等学校までの英語が苦手であり，3割以上が中学校卒業の時点で，また半数近くが高校卒業の時点での英語の成績が良くなかった．しかし，その反面半数以上がもともと英語に興味があったと回答していた．

一方看護学校や助産師養成課程の受験において，英

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

語が受験科目にはない学校を選択しているものがおり，さらに，看護学校に入れば英語の勉強をしないと考えていたものが3割，助産師学校においては5割以上が考えていた．

そして看護学校の一般教養で習った英語が役立たないと考えているものが約半数いた．また看護学校では6割以上が医療系の英語を学んでいる．しかし看護学校の英語はつまらなかったと回答しているものが3割近くいた．そして助産師学校で英語は必要がないと考えているものも11.8%いた．その背景には助産師養成コースにおいては，かなり過密なカリキュラムが組まれており，その殆どが必須科目であることから英語を一般教養のレベルで学習しているだけのゆとりがないことが考えられる．当学では卒業後に学位授与機構への申請がメリットとしてあげられているが，卒業生は学位授与後に修士課程に進学していない．まだ専攻科が設立されて7年目であり，卒業生の殆どは助産師として臨床で働いており，助産師として臨床指導者などの役割が課せられる年代である．したがって，修士課程などへの進学はもう少し長い目で見ない限り，結果が出ない背景ではある．

しかし，修士課程などへの橋渡しとしての英語の授業があるかどうかについては，7回の講義では無理がある．これらのアンケートをみると，高校の時点で英語が苦手であったというものが半数以上おり，助産師学校に入学してまで英語の勉強をするとは考えていなかったものも半数以上いる．その点からみれば，助産師学校に入学してからの英語は英語力をつけるものではなく，英語が楽しめること，および助産の勉強に役立つものであれば学生も抵抗がないのではないかと考えてこの2年間は授業を組んできた．

6）現在の自分の英語力

現在の英語力については，表6に示すとおりとなった．アルファベット26文字が順にいえないものはいなかった．

辞書の引き方については意味を調べるものが半数以上おり，半数が引くのが遅いと回答していた．挨拶程度ならできるというものが6割以上いた．更に，英語検定，TOEICなどを受けたことがあるものが7割以上いた．

表6．現在の英語力

		肯定群	%
43	ABCが最後までいえない	34	100
44	辞書は読むものである	17	50
45	辞書は意味を調べるものである	19	55.9
46	専門用語なら意味がわかる	1	2.9
47	カルテの用語が何語だかわからない	26	76.5
48	あいさつ程度ならできる	23	67.6
49	町の英語の標識などがわかる	14	41.2
50	英語検定，TOEICなど受けたことがある	26	76.5

7）カタカナ語から始めることについて

現在医療界では，カタカナ語が多く飛び交い，ルーツが何語だか分からないで使用されている例がある．今回の調査ではカルテ用語が何語だかわからないというものも7割以上いた．実習施設によってはカルテ用語が英語とは限らず，ドイツ語が優先されている施設も多々見受けられる．現時点では，もし実習に対応するために，カルテ用語を中心に授業を組むのなら英語表現だけではまかなえない現実がある．飯田も臨床現場では看護師～医師間，看護師～看護師間の連絡や指示，カルテや看護記録，その他専門職のコミュニケーションにドイツ語や英語を語源とするカタカナ語や略語が頻繁に用いられており，困惑，苦労する看護職も多いと述べている．そして看護記録，カルテ，口頭での連絡，指示の60～90%近くにカタカナ語，略語が多様化されており，その意味が分からない，職場によって使用法が異なるなど，ほぼ全員が困った経験をしていたと述べている[1]．

今後，専攻科では分娩の実習施設が7箇所（来年度は8箇所）にわたり，それぞれの実習場におけるカルテ用語を把握していく必要があると思われる．カタカナ英語で意味が英語の原義とあまり変わらない単語はまとめて直接的に学習させると効果が期待されるともいわれている．しかし，カタカナ英語が有効であるという提言を裏付ける研究がなく，教材に出てきた場合にいくつかの同様の例を示し，何かの機会に関連するカタカナ英語を指導することで身近に感じさせることができるといわれている[2]．

また，専攻科を受験するものの中には，先述したように半数以上は助産師学校で受験科目に英語がない学校を選んで受験している．しかし，それ英語が受験科目に含まれている学校を受験する可能性もあり，そのような背景から，英語がまったくできない学生が受験することは考えにくい．そして7割以上が何らかの検定を受けた経験があることは，専攻科を受験する学生の英語力をある程度保証していることが窺える．

平成20年度は学生数が30名になる予定である．学生数が30名になると，これまで以上に学生の背景が様々になってくることが予測される．学生のモチベーションやこれまでの基礎学力，入学以前の学習歴，臨床経験などが今以上に多様化することは免れない．

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

これまで通り，事前調査を行いなるべく学生のニーズに沿って，講義が助産学とはかけ離れた内容にならないように配慮しないと，学生は「過密なカリキュラム」に「余計な英語が負担」になる結果となるであろう．小川，山家らが述べるように学生の質，時間数，クラスの大小，目的などを考慮しないで外国語を取り入れることは危険であり，諸条件を考慮して教授法を考えていく必要があるといわれている[3]．事前に調査を行うことは必要であり，従って今後は，それぞれの実習施設でどのような産科分野の英語が使われているのか，及び英語以外のドイツ語やラテン語などの医学用語がマスターできるように組み込んでいかなければならない．「助産学英語表現法」という講義名を「助産学医学外国語」のように改めて臨床に則した医学用語が分かることを目的とすることが望まれる．

専攻科学生はわずか1年間で全ての助産技術及び助産に関する科目を習得し，国家試験に合格しなければならず，その殆どが臨床に出るため，そこで困らないために助産学の英語及びその他の外国語が見て分かるレベルまでは習得することが望まれ，それは7回の講義で可能であると考える．

結　論

助産師学生を対象に，助産分野で使われる英語を講義する際に，臨床に行って困惑しないための配慮として，英語以外の付随する産科用語なども系統立てて紹介することが必要である．講義の回数などから考えても，学生のニーズに応えられない点も多々ある．そして学生の背景も様々なので，講義に際して事前調査を行うことは継続すべきことである．

謝　辞

今回の報告を作成するに当たり，事前調査に協力をしてくださった専攻科学生6期，7期生34名に謝辞を表します．

引用文献

1）飯田恭子：看護領域の英語の課題．医学界新聞，2623：4，2005．
2）望月正道，相澤一美ら：英語語彙の指導マニュアル．大修館書店（東京），141-143，2003．
3）小川芳男，山家保：英語教授法展望．研究社（東京），147，1959．

The Medical English Needs of Midwifery Students As Seen in the Last Two Years

Yumi Suzuki

Abstract

Seven lectures on medical English are included as part of the midwifery course. To begin with, these lectures centered on conversation and comprehension as a "method for expressing midwifery studies in English," and were given by a visiting lecturer. However, after the lecturer changed, the differences in ability of each student were considered and the targets and level of the lectures were changed. While the lectures are named as a specialist subject for students, the English within the midwifery studies is the same as that in general education and it is felt that the subject has been placed in the curriculum as a non-taxing subject. The minimum target to be obtained from the seven lectures, is the ability to, in practice, understand clinical records through reading comprehension and so forth. At present, half of the student body are sitting for examinations at midwifery schools where English is not an examination subject. For the other half, over three quarters have examination schedules that include English examinations. While it may not be the case that students are not interested in English, it is suggested that there is a tendency for students able to use English to not want to study it as a specialist course. As seven English lectures are included in the already over-flowing midwifery curriculum, it is necessary to understand the needs of the students and to unify the contents of the lectures with those needs. This time, the same pre-course questionnaire was given to the students of last year and this year, as it was felt that it could be used as a basis for studying the contents of future lectures. For this reason, the needs of students from two years were collected.

NII-Electronic Library Service